第六章　夕霧の物語　雲居雁と落葉宮の間に苦慮

［第一段　夕霧、花散里へ弁明］

六条の院にぞおはして（大将源君は六条院のほうへお帰りになって）、やすらひたまふ（休息なさいます）。東の上（東の町を預かる花散里は）、

「*一条の宮渡したてまつりたまへることと（あなたが一条宮を娶り申し上げなさったと）、*かの大殿わたりなどに聞こゆる（あちらの実家の藤原殿では噂しているようですが）、いかなる御ことにかは（どういうことなのですか）」　*「一条の宮渡したてまつりたまへることと」は、渋谷訳文に＜一条の宮をお移し申し上げなさったと＞とあり、与謝野訳文に＜一条の宮様と御結婚なすったと＞とある。大将が「さやうにも」と応えている発言内容から逆推すると、此処の文意は与謝野訳文のように読むべきものに見える。が、「渡したてまつる」は「一条の宮」を＜渡して差し上げる＞という言い方なので、「一条の宮」が取れる格助詞は被対象体を示す「を」しかなく、そも「（一条の宮様）と」と共同主体動作を示す格助詞の文意で＜結婚する＞や＜挙式を上げる＞という言い方には成らない。となると、問題はやはり「渡す」の意味だ。消去法で先ず、是を＜譲り渡す＞の意味と取って、「一条の宮」を宮様ではなく宮邸と見做して＜宮に一条邸をお譲り渡し申し上げる＞という文意は、文型としては成立するが、宮邸は元々宮の所有物件なので文意自体が間違いであり、却下する。また、整備して手渡す、という文意は＜整備＞が話題でもない当場面では、発言文として成立しない。で、残るのが＜移す＞の意で、となると渋谷訳文の通りということに成る。が、宮は人で物ではないのだから＜移す＞というのは＜移動させる＝渡らせる＞ことで、正に＜引越しさせる＞という今の話題に合うように見えてしまう。実は、それが紛らわしい。それにまた、是が当然に宮の引越しと無縁の話題である筈もないが、しかし、この「渡す」は＜手を取って渡らせる＝嫁に迎える＞と読むべきなのだろう。この言い方の前提と成る、大将が宮を一条邸で待ち受ける事の正統性は、物件の所有権ではなく、その管理者の公然たる地位の認識にある、と見てみたい。実際には、大将は宮を階で手を取って迎えることは無かったようだが、それでも「渡す」は寝殿造りの貴族屋敷に基づいた＜嫁に迎える＞という言い方だった、と読んで置く。　*「かのおほとのわたり」は＜夫人の実家の方＝藤原殿＞。

と、いとおほどかにのたまふ（と、とてもおっとりとお尋ねになります）。*御几帳添へたれど（隔ての御簾には御几帳が添えられていたが）、側より（そばより、横の隙間から）ほのかには（少しは）、*なほ見えたてまつりたまふ（やはり大将は上の御顔色を拝し申しなさいます）。　*「御几帳添へたれど」は注に＜夕霧との間に御簾の他にさらに御几帳を添えて隔てている、意。＞とある。　*「なほ」は大将の花散里への親愛の情の表れなのだろう。花散里が大将の母親代わりを勤め出したのは、大将が学生の時なので、直面できるほど幼くはなかっただろうが、それでも、日常的に直答し合う仲なので、明るい場所ではっきりと顔を見る機会もあったことだろう。学生の頃は大将は花散里を不器量と見て、その価値に気付かなかった。が、今となってみれば、王家作法に明るいこの人は、その文化性を高く認めざるを得なかっただろう。特に今は、大将は生まれてこの方一番に、王家文化への興味が極度に興奮するほどに高まっている時であろう事を思えば、花散里の仕種にまで気になるのも無理はない。

「さやうにも、なほ人の言ひなしつべきことにはべり（そのようにも、やはり世間の人は言い立てるものなのでしょう）。故御息所は、いと心強う（故御息所はとても気丈に）、あるまじきさまに言ひ放ちたまうしかど（宮と私との結婚はあるまじきもののように言い放っていらっしゃいましたが）、限りのさまに、御心地の弱りけるに（最期が近いように御加減が弱った時に）、また

見譲るべき人のなきや悲しかりけむ(他に宮を見守るに足る人がいないのを悲しんでか)、亡からむ後の後見にとやうなることのはべりしかば(亡くなった後の宮の後見にといったようなお話しがございまして)、*もとよりの心ざしもはべりしことにて(元々故督の君の遺言にもあったことですので)、かく思たまへなりぬるを(そのように宮をお世話申そうと思うようになったものですが)、さまざまに、いかに人扱ひはべらむかし(さまざまに世間の人はどう噂するものやら)。さしもあるまじきをも(ありそうもないことを、さもありそうに)、あやしう人こそ(変な風に人は)、もの言ひ*さがなきものにあれ(面白がって言う口の悪さですから)」　*「もとよりの心ざし」は注に＜『完訳』は「柏木の遺言をさすか」「もとより故人とのよしみもございますこととて」と注す。＞とある。元々自分の女にする心算だった、という言い方ではないようだ。　*「さがなし」は＜口が悪い＞。

と、うち笑ひつつ(と大将は笑いながら)、

「かの正身なむ(当の宮御本人は)、なほ世に経じと深う思ひ立ちて(もう俗世に未練は無いと深く思い立って)、尼になりなむと思ひ結ぼほれたまふめれば(尼になりたいと思い詰めていらっしゃるようですが)、何かは(此処で宮が出家なさるのは、どうしても私との仲の不都合を詮索されて)、こなたかなたに聞きにくくもはべべきを(あちらこちらに体裁の悪い話にもなろうかというもので)、さやうに嫌疑離れても(そうした懸念が無いとしても)、また(やはりまた)、かの遺言は違へじと思ひたまへて(御息所の遺言には背くまいと存じまして)、ただかく言ひ扱ひはべるなり(ただこのようにお世話申しているのです)。

院の渡らせたまへらむにも(殿が此方へ御見えになった時にも)、ことのついではべらば(何か話のついでがあれば)、かうやうにまねびきこえさせたまへ(そのようにお話し申し上げて下さい)。ありありて(此処まで穏やかに暮らしてきて子も儲け)、心づきなき心つかふと(今になって良く分からない気を起こしたと)、思しのたまはむを憚りはべりつれど(殿が私の事を、お思いになり仰るのは気が引けますが)、げに、*かやうの筋にてこそ(やはり男女の仲は)、人の諫めをも(人の注意も)、みづからの心にも従はぬやうにはべりけれ(自分の自制心にも従わないもののようでございます)」　*「かやうの筋」は注に＜『完訳』は「恋は盲目と世間で言うとおり」と注す。＞とある。分かり難い文意だが、下に「忍びやかに聞こえたまふ」とあるので、大将は花散里には素直に本心を打ち明けた、と読んで置く。最後の味方に頼みたい、という気持もあるのかも知れない。

と(と最後は)、忍びやかに聞こえたまふ(声をひそめて申しなさいます)。

「人のいつはりにやと思ひはべりつるを(誰かの作り話かと思っておりましたが)、まことにさるやうある御けしきにこそは(本当にそのような御事情だったとは)。皆世の常のことなれど(人の死も男女の仲も、すべて世間に普通にあることですが)、三条の姫君の思さむことこそ、いとほしけれ(三条の姫君のお気持が気懸かりです)。のどやかに慣らひたまうて(穏やかな暮らしに慣れていらっしゃるので)」

と聞こえたまへば(と上が申しなさると)、

「らうたげにものたまはせなす(可愛らしくお呼びになりますね)、姫君かな(姫君ですか)。いと*鬼しうはべるさがなものを(それはもう鬼のような口やかましい者を)」とて(と大将は仰っ

て)、　*「鬼し(おにし)」は＜鬼のようだ、残虐だ＞と古語辞典にある。「さがなもの」は＜手に負えぬもの。やかましや。＞とある。

「などてか(何も決して)、それをもおろかにはもてなしはべらむ(それすらも疎かに待遇申してはおりません)。かしこけれど(畏れながら)、*御ありさまどもにても(此方の御方様方の平穏なお暮らしぶりに照らして)、推し量らせたまへ(妻の取るべき態度なりを、推し量って考えてみて下さい)。　*「おんありさまども」は＜この六条院の御方様方の平穏な暮らし振り＞のことらしい。が、大将はそれと比べて何を「推し量らせたまへ」と言っているのか。花散里は三条夫人が「のどやかに慣らひたまうて」いらしたのに「いとほし」と、この大将の宮との結婚を心配しているので、それに応えて＜心配ない＞と言ったのだろうか。しかし、「推し量る」は＜具体的な絵を思い描く＞のだろうから、六条院と三条邸とでは余りにも事情が違っていて、六条院と比べる事自体に無理があり、六条院の御方々は三条夫人の参考対象にならない。と思ったが、下文に、大将が理想の妻像みたいな事を語っているようなので、要するにこの「推し量らせたまへ」は、紫の上や花散里を手本にして三条夫人も大人しくして欲しい、という大将の願望から出た言葉で、むしろ妻よりも自分の面倒な立場に同情して欲しい、切ない事情を分かって欲しい、と母代わりの花散里に甘えている言い方、なのだろう。当時の宮廷読者なら当たり前に分かる文意なのかも知れないが、私には鬼のような難文だ。

なだらかならむ*のみこそ(穏やかな態度でいることこそが)、人は*つひのことにははべめれ(妻の本来あるべき姿なのでしょう)。さがなくことがましきも(実際の妻の口うるさく事を荒立てるようなことも)、しばしはなまむつかしう(暫くの間は厄介なので)、わづらはしきやうに憚らるることあれど(面倒に思って宮家への行き来を控えることもあるだろうが)、それにしも従ひ果つまじきわざなれば(いつまでも大人しく聞いても居られませんので)、ことの乱れ出で来ぬる後(行き来がはっきりしてくると)、我も人も(私も妻も)、憎げに*飽きたしや(反目しあってつくづく厭になります)。　*「のみこそ」の「のみ」は＜それだけ＞という排他的な意味ではなく、正にそのものを強調する＜それこそ＞という副助詞だ。この「のみこそ」の「こそ」は強調語だが、言い回しとしての強調文型を示す係助詞で、現代語のように「なだらかならむ」こと其自体を強調する語用ではない。つまり、言い換え文での＜ことこそ＞は原文の「のみ」に対応していて、原文の「こそ」は言い換え文には表われない。　*「つひのこと」は＜結局はそうなること＞と大辞泉にある。あるべき姿、とまで言えるのか分からないが、此処は是非そう言いたい。「人」は文脈からして、自分の妻、大将の三条夫人。「人は」の「は」は論旨文の主格を示す係助詞なので、本来の構文では「なだらかならむ」の前に置かれるべきものを、「なだらかならむのみ」を強調するために倒置されている、のだろう。　*「飽きたし」は＜「飽き痛し」の意。飽き飽きする。ひどく厭になる。＞と古語辞典にある。

なほ(やはり)、南の御殿の御心もちゐこそ(南御殿の紫の上の御配慮こそ)、さまざまにありがたう(何かと尊く)、さてはこの御方の御心などこそは(次いであなた様の御心構えなどこそは)、めでたきものには(見習うべきものと)、見たてまつり果てはべりぬれ(思い知り申し上げるところです)」

など(などと大将が上を)、ほめきこえたまへば(お褒め申し上げなさると)、笑ひたまひて(上はお笑いになって)、

「もののためしに引き出でたまふほどに(そのように私を引き合いにお出しなさると)、*身の人悪ろきおぼえこそあらはれぬべう(立場の情けなさの方が目に付くでしょうに)。　*「身の人悪

ろきおぼえ」は与謝野訳文に＜私が愛されていない妻であること＞とある。それが真意かも知れない。ただ理屈っぽく言えば、私が大人しくしているのは人間が出来ているからじゃなくて、物が言えない弱い立場だからで、あなたは三条夫人をそういう立場に置く心算なのか、という皮肉にも見える。

さて(それにしても)、をかしきことは(おかしなことは)、院の、みづからの御癖をば人知らぬやうに(殿が御自分の女癖の悪さを他人事のように)、いささかあだあだしき御心づかひをば(少しばかり移り気なあなたの浮気心を)、大事と思いて(大袈裟にお思いになって)、戒め申したまふ(ご注意なさることです)。後う言にも(しりうごとにも、陰口にまでも)聞こえたまふめるこそ(申していらっしゃるのは)、賢しだつ人の(利口ぶった人が)、おのが上知らぬやうにおぼえはべれ(自分の欠点には気付かないことのように見えます)」

とのたまへば(と仰ると)、

「さなむ(そうなんですよ)、常にこの道をしも戒め仰せらるる(いつもこのことには忠告を仰せになります)。さるは(しかし)、かしこき御教へならでも(尊い教えを頂かなくても)、いとよく*をさめてはべる心を(それはもう大人しくしておりますものを)」　*「をさむ」は＜平定する、落ち着かせる＞だが、その内情は＜収めて抑え付けている＞のか＜治めて納得させている＞のか。また、「心」は＜気持＞なのか＜考え＞なのか。ただ、是は内心文ではなく花散里に対しての発言文である事を思えば、どういう文意が説得力があるかと言えば＜穏やかな心構え＝行儀良くしていること＞だろう。

とて(と言って大将は)、げにをかしと思ひたまへり(本当に滑稽にお思いになりました)。

御前に参りたまへれば(やがて大将が殿の御前にご挨拶に参上なさると)、かのことは聞こし召したれど(源氏殿は大将が一条邸に宮を迎え入れなさったことはお聞きになっていらっしゃったが)、何かは聞き顔にもと思いて(今それを聞き知ったという顔で話題にしても、褒めるわけにも責めるわけにもいかないので不都合に思って)、ただうちまもりたまへるに(何も仰らず、ただ大将の表情を窺いなさっては)、

「いとめでたくきよらに(実に立派で美しく)、このころこそねびまさりたまへる御盛りなめれ(此処に来て器量を上げなさった御盛りぶりだ)。さるさまの好き事をしたまふとも(そうした女遊びをなさっても)、人のもどくべきさまもしたまはず(他人にとやかく言わさせる小者ぶりではいらっしゃらない)。鬼神も罪許しつべく(鬼神も認めるほどの)、あざやかにものきよげに(目を見張る武者ぶりで)、若う盛りに匂ひを散らしたまへり(若い盛りの匂いを辺りに撒き散らしていらっしゃる)。

もの思ひ知らぬ若人のほどにはたおはせず(経験不足の青二才ではまたいらっしゃらず)、かたほなるところなうねびととのほりたまへる(文句の付けようもなく一人前になっていらっしゃるのだから)、ことわりぞかし(色々あって当然だ)。女にて、などかめでざらむ(女がどうして放って置くものか)。鏡を見ても、などかおごらざらむ(鏡を見れば自信も涌くだろう)」

と、わが御子ながらも、思す(と自分の子供ながら大した男ぶりだとお思いになります)。

［第二段　雲居雁、嫉妬に荒れ狂う］

　日たけて、殿には渡りたまへり（大将は日が高くなってから三条の自邸にお帰りになります）。入りたまふより、若君たち、すぎすぎうつくしげにて、まつはれ遊びたまふ（着くや否や子供たちが次々と可愛らしい姿で纏わりついて遊びなさいます）。女君は、*帳の内に臥したまへり（夫人は寝台の中で横になっていらっしゃいました）。　*「帳の内（ちゃうのうち）」は＜御帳台の中＞。

　入りたまへれど、目も見合はせたまはず（大将も寝台にお入りになったが、夫人は目も合わせなさいません）。つらきにこそはあめれ、と見たまふもことわりなれど（その夫人の態度から、不満なのだろう、と大将が夫人の気持を察しなさるのも当然だが）、憚り顔にももてなしたまはず（大将は悪びれた素振りもなさらず）、御衣をひきやりたまへれば（顔を隠している夫人の夜着を引き退けなさると）、

　「いづことておはしつるぞ（帰るお家をお間違いでしょう）。*まろは早う死にき（私はもう死んでしまいました）。常に鬼とのたまへば、同じくはなり果てなむとて（あなたがいつも私を鬼と仰るので、いっそ本当に鬼になってしまいたくて）」　*「まろは早う死にき」の子供っぽい感性が妙に現代的で驚く。本当に平安中期の起草なのかと疑うほどで、久々に覚える親近感が不思議だ。三十女の台詞かとも思うが、それだけに可愛らしさが実感できる気さえする。

　とのたまふ（と夫人は仰います）。

　「御心こそ、鬼よりけにもおはすれ（お心は鬼以上でいらっしゃいますが）、さまは憎げもなければ、え疎み果つまじ（姿は可愛らしいので憎み切れませんね）」

　と、何心もなう言ひなしたまふも（と大将が平然と愛想を言いなしなさるのも）、心やましうて（夫人は気に入らず）、

　「めでたきさまになまめいたまへらむあたりに（格好良く色気を振りまいていらっしゃる近くに）、あり経べき身にもあらねば（居てはいけない見苦しい私なのだから）、いづちもいづちも失せなむとするを（何処へなりとも消え去ろうというのに）、かくだにな思し出でそ（こんな風に気紛れに思い出してお帰り下さいますな）。あいなく年ごろを経けるだに、悔しきものを（長く連れ添って来たことさえ悔やまれます）」

　とて、起き上がりたまへるさまは、いみじう愛敬づきて、匂ひやかにうち赤みたまへる顔、いとをかしげなり（と言って起き上がりなさる姿はとても素直さがあって、興奮のままに紅潮なさった顔がとても愛らしい）。

　「かく心幼げに腹立ちなしたまへればにや（こう子供っぽく腹を立てていらっしゃるので）、目馴れて（見慣れて）、この鬼こそ、今は恐ろしくもあらずなりにたれ（この鬼は今では恐ろしくもなくなってしまいました）。神々しき気を添へばや（霊気を着けないと）」

　と（大将は）、戯れに言ひなしたまへど（冗談めかして仰るが）、

「何ごと言ふぞ(何を言うか)。おいらかに死にたまひね(黙って死になさるが良い)。まろも死なむ(私も死ぬ)。見れば憎し(見れば憎いし)。聞けば愛敬なし(聞けば気に障る)。見捨てて死なむは*うしろめたし(一人で死ぬのは厭だ)」　*「うしろめたし」は＜先行き不安、後顧の憂い、残る気懸かり＞の意味で使われる事が多いが、此処では、自棄になって自分ひとりだけが死んだら、子供の心配はこの際は左て置くらしいが、大将は宮と楽しく暮らすことになって、気懸かり、と言うよりは、バカを見る、ような状況だ。で、「うしろめたし」は「後ろ目痛し」の略語とも説明されるので、痛し－辛い－厭だ、くらいの言い方に取って置く。

とのたまふに(と夫人が仰るのが)、いとをかしきさまのみまされば(実に愛らしさばかりが増すので)、こまやかに笑ひて(大将は愛情深く笑って)、

「*近くてこそ見たまはざらめ(「見れば憎し」と仰るのは、実際には御覧にならずとも)、よそにはなにか聞きたまはざらむ(誰かから何か嫌なお話をお聞きになったようですね)。さても(それでそのように死ぬなどと仰って)、契り深かなる瀬を知らせむの御心ななり(私たちの縁の深さを気付かせようとのお考えなのですね)。にはかにうち続くべかなる冥途のいそぎは(引き続いて行なわれるように私たち二人の葬儀は)、さこそは*契りきこえしか(確かに誓いを結び申してありますからね)」　*「近くてこそ～」は女君が言う「見れば憎し、聞けば愛敬なし」に呼応した、しかし、洒落語用で話題をずらす言い方、なのだろう。　*「ちぎりきこえ」は「契り深かなる瀬」に掛けた洒落語用なのだろう。で、あえて「結び申す」という言い方にしてみた。

と(と言葉遊びで)、いとつれなく言ひて(わざと冷静に言って)、何くれと慰めこしらへきこえ慰めたまへば(何かと夫人の興奮を鎮めるように気を遣ってお応え申し宥めなさると)、いと若やかに心うつくしう(夫人はとても伸び伸びと素直で)、らうたき心はたおはする人なれば(可愛らしい心根でまたいらっしゃるので)、なほざり言とは見たまひながら(大将の言葉をその場しのぎの出まかせとはお思いになりながら)、おのづからなごみつつものしたまふを(次第に和んで行きなさるのを)、いとあはれと思すものから(本当に愛しいとお思いになりながら)、心は空にて(大将の心は空を飛んで)、

「かれも(あちらの一条宮も)、いとわが心を立てて(とても決心が固く)、強うものものしき人のけはひには見えたまはねど(強くものを言い張る人のようには見えなさらないが)、もしなほ本意ならぬことにて(それでもやはり私との結婚を不本意だとして)、尼になども思ひなりたまひなば(尼になどに成ってしまいなさったなら)、をこがましうもあべいかな(これまでの苦労が何の甲斐もない、無駄骨になってしまう)」

と思ふに(と思えば)、しばしはとだえ置くまじう(暫くは間を置かずに通わないとと)、あわたたしき心地して(落ち着かない気分で)、暮れゆくままに(日が暮れるに連れて)、「今日も御返りだになきよ(今日も御返歌さえ無かったな)」と思して(とお思いになって)、心にかかりつつ(宮の気持が気懸かりなまま)、いみじう眺めをしたまふ(じっと庭を眺めていらっしゃいます)。

[第三段　雲居雁、夕霧と和歌を詠み交す]

昨日今日つゆも参らざりけるもの(夫人は昨日今日とまったく食事をお摂りなさらなかったものを)、いささか参りなどしておはす(少し召し上がっていらっしゃいます)。

「昔より(初めから)、御ために心ざしのおろかならざりしさま(私のあなたへの愛情の疎かならざることは)、大臣のつらくもてなしたまうしに(今の致仕大臣の藤原の父上が私たちの仲を裂きなさったことで)、世の中の*痴れがましき名を取りしかど(私は世に失恋男として知られたが)、堪へがたきを念じて(堪え難きを堪え)、ここかしこ(あちらこちらから)、すすみ*けしきばみしあたりを(進んで申し込みのあった縁談を)、あまた聞き過ぐししありさまは(数多く聞き過ごしてきた一途さは)、*女だにさしもあらじとなむ(女でもそうは身持ちが堅く無いと)、人も*もどきし(世間の人も冷やかしたものだ)。　*「痴れがましき名」は＜恥辱の汚名＞みたいな語意だが、語調としては＜愚かしい者←見っともない者←失恋男＞が分かり易い。 *「けしきばむ」は＜意向を示す＝縁談を申し込む＞。*「女だにさしもあらじ」は注に＜女性には多数の縁談の申し込みを断ることがよくある、というのが前提になっている。＞とある。安売りはしない、勿体をつける、あたりが一般的な意味だろうが、それにも増して世を嫌う意固地さを評して＜身持ちが堅い＞という言い方をするのだろう。　*「もどく」は＜まねる＞。時に、身振りを真似て、その特異さや非常人ぶりを論って冷やかす、語感。

今思ふにも、いかでかはさありけむと(今思うにも、どうしてそうだったのだろうかと)、わが心ながら、いにしへだに重かりけりと思ひ知らるるを(自分の気持ではありながら、昔から重々しかったものだと思い知らされるが)、今は、かく憎みたまふとも(今はそんな私をあなたは、こうも憎らしくお思いになっても)、思し捨つまじき人びと、いと所狭きまで数添ふめれば(見捨てては置けなさらない子供たちが、こうも所狭しと数が増えて)、御心ひとつにもて離れたまふべくもあらず(あなた一人の気持で私と離れなさることは出来ません)。*また、よし見たまへや(もう一度良くお考え下さい)。命こそ定めなき世なれ(何時とも知れぬ命なれど、死ぬるは共にと誓い合った仲ではありませんか)」　*「またよし見給へや」は＜じゃ良いでしょう、見ていて御覧なさい＞と同じ言い方ではあるのかも知れない。が、此処では‘think it over’に違いない。というのは、他ならぬ「命こそ定めなき世なれ」をどう読むかに掛かっている。注にはこの文意について＜『集成』は「人の命は不定だが、私のあなたへの情愛は不変だ、の意」と注す。係助詞「こそ」--「なれ」已然形の係結び、逆接のニュアンスの余意余情表現。＞とある。同感だ。であれば、この「またよし見給へや」は＜良く考え直してくれ＞と取るのが普通だ。が、渋谷、与謝野の両訳文共に「見給へや」を＜見ていてください＞としてある。見せ付ける、という語意なら、それに続く「命こそ定めなき世なれ」は＜どうせ果敢無い命なら、もう死んでやる＞と見なければならない。が、そうした順接文には読めない。何故か。死ぬ、と騒いでいるのは夫人であって、発言者の大将ではないからだ。大将は夫人に「もて離れたまふべくもあらず(死んだり出家などをしてはならない)」と言っている。

とて、うち泣きたまふこともあり(と言って大将は泣いたりしなさいます)。女も、昔のことを思ひ出でたまふに(夫人も昔のことを思い出しなさって)、あはれにもありがたかりし御仲の(感慨深く尊い二人の御仲を)、「さすがに契り深かりけるかな(やはり然程に縁が深かったのだ)」と、思ひ出でたまふ(と思い直しなさいます)。

なよびたる御衣ども脱いたまうて(大将が着慣らした部屋着をお脱ぎになって)、心ことなるをとり重ねて焚きしめたまひ(新調した服を重ね着して香を焚き染めなさり)、めでたうつくろひ化粧じて出でたまふを(整然と身繕いして粧し込んでお出掛けなさるのを)、灯影に見出だして(夫人は火影に目にして)、忍びがたく涙の出で来れば(堪えきれず涙が出てくるので)、脱ぎとめたまへる単衣の袖をひき寄せたまひて(夫が脱ぎ置きなさった着物の袖を引き寄せなさって)、

「馴るる身を 恨むるよりは 松島の 海人の衣に 裁ちやかへまし （和歌 39-21）

「綻び直すくらいなら 田舎暮らしに甘んじる （意訳 39-21）

*注に＜雲居雁の独詠歌。手にとった源氏の下着から「馴るる」と出る。「恨む」「裏」、「尼」「海人」は掛詞。「馴るる」「裏」「衣」「裁ち」、「浦」「松島」は縁語。『完訳』は「夫に飽きられた悲しみを、衣の縁語表現でまとめた歌」と注す。＞とある。「裁ち替ふ」は＜布などを裁ち切って衣服を作り変える＞と古語辞典にある。歌筋は「馴るる身を（着古した服の身頃を）」「裁ちやかへまし（いっそ仕立て直したい）」で＜「夫に飽きられた」古女房の悲哀＞を詠んでいるが、裏－浦－松島－海人－尼、と言葉遊びをする詠み風体に切迫感は無い。四季折々の情緒豊かな暮らしが日常という大将夫人にとって、風情ある詠み方こそが生活感の表現となっていて、この可愛げさえある気の利いた言い回しで、実は夫人自身は深く思い詰めている、ということになるらしい。装飾に見えることの方に本心が込められている。そっちかい、みたいな。私には分かり難いことだが、大将もそれに気付かない、とかいう設定だろうか。いやしかし、そういう実相は本当に有りそうだ。

なほ*うつし人にては（やはり俗世のままでは）、え過ぐすまじかりけり（暮らして行けない）」

*「うつしびと」は「現し人」で＜生きている人＞だが、特に出家者に対して＜在俗の人＞をいう、と古語辞典にある。「あまのころも」と詠んだのだから、明らかに後者だ。

と、独言にのたまふを（と独り言に仰るのを）、立ち止まりて（大将は聞き付けて立ち止まり）、

「さも心憂き御心かな（それは良くないお考えです）。

松島の海人の濡衣なれぬとて、脱ぎ替へつてふ名を立ためやは」（和歌 39-22）

待つ身の辛さを嫌気して、山に逃げるは名折れなり」（和歌 39-22）

*注に＜夕霧の返歌。「松島」「海人」「馴る」「裁つ」の語句を受けて返す。「やは」反語表現。私を捨てて尼になったという噂が立ってよいものか。『河海抄』は「松島や小島の磯にあさりせし海人の袖こそかくは濡れしか」（後拾遺集恋四、八二八、源重之）。『源氏物語事典』は「音に聞く松が浦島今日ぞ見るむべも心あるあまは住みけり」（後撰集雑一、一〇九四、素性法師）を指摘。＞とある。「松島」は「海人」を言い出す歌枕で、風情を添える語呂合わせ程の意味だろうし、此処では元々夫人の歌に詠み込まれている語なので、返歌の明示でもあるのだろうが、夫人の歌からして「松島」には＜待つ方＞の響きはあるかとも思う。「海人の濡衣なれぬ」は＜漁民の作業衣が古くなってしまった＞。だが、「馴る」は＜馴れる、馴染む＞が原義で＜着古す＞にもなれば＜気にならなくなる＞にもなる。そして、この語は下二段活用の自動詞で未然形も連用形も「馴れ」なので、「なれぬ」の「ぬ」は完了の助動詞「ぬ」の終止形とも、打消しの助動詞「ず」の連体形とも見做せる。また、「とて」の「と」は対象主体を客観認識する格助詞で、状態概念を指し示せるので、その点からも両者は成立する。で、「濡衣」だが、「海人の濡衣」と言えば＜漁民の作業衣＞だが、「濡衣」はやはり＜無実の罪＞であり、拡大解釈すれば＜傍迷惑、とばっちり＞で、「濡衣なれぬ」は＜傍迷惑に馴染めない＝トバッチリに嫌気する＞という言い方にもなるのだろう。あとは、「て」は接続助詞だが、順接にも逆接にもなるもので、論旨に関わると言うよりは、むしろ議論の場の意識集中を図る間合いの役割を果たす語で、此処では語調を整えている。「脱ぎ替へつてふ」は＜脱ぎ替えてしまったという＞という言い方だが、読みは＜ぬぎかえつちょう＞であり、今風に言えば＜脱ぎ替えちまったっつー＞みたいな砕けた響き。宛て付けの心算

でも、こんなことで出家したら、あなたの方こそ体裁が悪くなる、という憎まれ口か。傍目には大人気無くても、夫婦喧嘩は犬も食わない、では済まないのかも知れない。

うち急ぎて(と言い返しなさったが、取り急ぎのことで)、いと*なほなほしや(ちょっと品に欠けるでしょうか)。　*「なほなほし」は＜平凡だ、普通だ＞ともあるが＜品が高くない、卑しい＞ともある。詠みっぷりが端っ葉だ、と言っているのだろう。深読みすれば、しかし平穏では済まない、という皮肉かも。

［第四段　塗籠の落葉宮を口説く］

かしこには(一条邸では)、なほさし籠もりたまへるを(宮がまだ塗籠に籠もっていらっしゃるのを)、人びと(女房たちが)、

「かくてのみやは(こうしてばかりいらしては、いけません)。若々しうけしからぬ聞こえもはべりぬべきを(子供っぽいと悪い噂も立ちましょうから)、例の御ありさまにて(いつものお部屋で)、あるべきことをこそ聞こえたまはめ(殿にお考えの程を申し上げなさいませ)」

など、よろづに聞こえければ(などと色々説得申したので)、さもあることとは思しながら(それもそうだとは宮もお思いになりながらも)、今より後のよその聞こえをも(今後身持ちの悪い女のように世間から蔑まされそうなことも)、わが御心の過ぎにし方をも(余りに油断していた自分の過去の不注意も)、心づきなく(納得できず)、*恨めしかりける(残念な思いが募るのです。)
*「恨めしかりける」の「ける」は持続状態を示す助動詞「けり」の連体形だが、是は文意からして「人」を修辞するものではなく、敢えて言えば下に＜ものなり＞などが省かれた文末、語感で言えば「をも」の列挙語用を受けた一種の係り結びで、此処で句点を打つ校訂とすべき文、に思われる。このことは何と言っても文意が示していると思うが、このように校訂で文構成を外形的に落ち着かせた上で、更に明示するために改行までした上で、中身を見直してみたい。さて、「うらめし」は＜残念だ＞という形容詞で、「うらめしかり」はその連用形だが、「うらめしく」という表現よりは「うらめしくあり(残念に思っている)」という客観視の語感。そして、「けり」は持続意を示すので、「恨めしかりける」は＜ずっと恨めしい思いが続いている、蓄積して募る＞という言い方。で、此処が肝心だが、この言い方は宮の外形描写なので、下の「人＝大将」には掛からない、というワケ。

人のゆかりと思し知りて(宮はそれもこれも、この大将という人の所為だと深く思い込んで)、その夜も対面したまはず(その夜も対面なさいません)。「*戯れにくく、めづらかなり(此処まで無愛想とは珍しい)」と(と大将は)、聞こえ尽くしたまふ(閉口なさいます)。　*「たはぶれにくし」は＜冗談が通じない＞で、要するに＜愛想が無い＞。

*人もいとほしと見たてまつる(小少将も今の御二人の状態をとても不都合に思い申すところです)。　*「人」は＜小少将＞らしい。下の発言文が取次者の弁、ということから分かるようだ。であれば、そういう場面だと明示するのもアリかと思う。注には＜主語は小少将の君。目的語は夕霧とも落葉宮とも、また二人とも解せる。＞とある。目的語も分かり難いし、「いとほし」の中身も分かり難い。ただ、「見たてまつる」は＜見る＞よりは＜思う＞のだろう。

「『いささかも人心地する折あらむに(いくらか平素のように落ち着いた気分になる時があって)、忘れたまはずは(その時に殿がお忘れなくお訪ね下されば)、ともかうも聞こえむ(あれこれ

とお返事申し上げます)。この御服のほどは(この喪中の間は)、一筋に思ひ乱るることなくてだに過ぐさむ(母上の供養を一筋に念じて他事に煩わされずに過ごしたいのです)』となむ(とのように宮様が)、深く思しのたまはするを(深く思い仰る最中の)、かくいとあやにくに(このようにまことに時機の悪いあなた様との結婚を)、知らぬ人なくなりぬめるを(知らぬ人が無いようになってしまいましたのを)、なほいみじうつらきものに聞こえたまふ(やはり非常に辛いことと宮は申していらっしゃいます)」

と聞こゆ(と大将に申し上げます)。

「思ふ心は(私の気持ちは)、*また異ざまにうしろやすきものを(噂などに左右される心配の無い、頼り甲斐のあるものなのに)。*思はずなりける世かな(何で通じないのかな)」とうち嘆きて(と大将は嘆息して)、　*「また異ざまに」は＜(そういうこととは)また別に、また違って＞という言い方なのだろう。「そういうこと」とは「知らぬ人なくなりぬめる」で、つまりは＜人の噂、他人の思惑＞だ。また、「うしろやすし」は＜安心だ、心強い＞だが、「また異ざまに」の「に」は「また異ざま」を「うしろやすし」の理由に立てる格助詞なのか、それとも単に「また異ざま」と「うしろやすし」の各別項を順次述べる際の接続助詞なのか。断定できないのでコテコテだが重複意で言い換えて置く。難文だ。　*「思はず」は＜［形動ナリ］心外である。期待がはずれて気に入らない。＞と大辞泉にある。「世」は此処では＜事態＞だろう。「思はずなりける世」は＜ずっと心外な事態＞みたいな言い方だが、「かな」の語調が＜何でこうなんだ＞という理よりは情の捨て台詞を感じさせる。

「例のやうにておはしまさば(いつものようにお部屋にいらっしゃれば)、物越などにても(几帳越しなどででも)、思ふことばかり聞こえて(お話し申し上げるだけで)、御心破るべきにもあらず(いきなり抱くような、御心を傷付けるようなことはしません)。あまたの年月をも*過ぐしつべくなむ(何年もそのままで構いません)」　*「過ぐす」は＜そのままにしておく。打ち捨てる。やり過ごす。＞などともある。

など(などと適当な出まかせの誘い文句を)、尽きもせず聞こえたまへど(いつまでも宮に小少将の取次で申し上げなさったが)、

「なほ(まだ)、かかる乱れに添へて(こういう喪中に心乱れているところに)、わりなき御心なむいみじうつらき(強引な殿の御心持ちが本当に辛い)。人の聞き思はむことも(人が聞いて思うであろう印象も)、よろづになのめならざりける身の憂さをば(常に水準以上であるべく何かと評判を気にしなければならない私の皇女たる立場の窮屈さを)、さるものにて(考えないとしても)、ことさらに心憂き御心がまへなれ(特に情けない殿のご配慮の無さです)」

と(と宮は)、また言ひ返し恨みたまひつつ(また言い返し嘆いては)、はるかにのみもてなしたまへり(殿を遠ざけた切りでいらっしゃいました)。

［第五段　夕霧、塗籠に入って行く］

「さりとて、かくのみやは(そうかといって、こうしてばかりいられようか)。人の聞き漏らさむこともことわり(私が宮に締め出されている事を世間が漏れ聞くことになるのも必然で時間の

問題だ)」と(と大将は)、はしたなう(きまり悪く)、ここの人目もおぼえたまへば(此処にいる女房たちの目も気になりなさって)、

「うちうちの御心づかひは(私たち二人の仲での宮のお気持は)、こののたまふさまに*かなひても(宮が仰る通りにわだかまりがあるままであったとしても)、しばしは*情けばまむ(少しは夫婦らしく見せかけたい。でないと)、世づかぬありさまの(世間離れしたこの形では)、いとうたてあり(実に不都合だ)。また、かかりとて(また、宮が引き籠もったままだからと言って)、ひき絶え参らずは(私の参上が途絶えたなら)、人の御名いかがはいとほしかるべき(男に見限られた女と宮の御評判が立つ事がどれほど案じられますやら)。ひとへにものを思して(一面だけでものをお考えになって)、幼げなるこそいとほしけれ(世間知らずの幼さが惜しまれます)」　*「かなひても」の「ても」は＜～であったとしても＞という仮定構文を示す係助詞で、論理上の述語は「いとうたてあり」となる。ということは、「しばしは情けばまむ」は構文上は試案提示の一例という条件項となるのであり、言い回しとしては其処で一息吐くとしても、論理文意としては句点ではなく読点で下に続くと読むべき、かと思う。　*「なさけばむ」は＜情けを帯びる－睦まじくする－夫婦らしくする＞。「情けばまむ」は意図して＜夫婦らしくするようにする－夫婦らしく見せかける＞。

など、この人を責めたまへば(などと小少将に詰め寄りなさると)、げにと思ひ(小少将も大将の御話を尤もなことと思い)、見たてまつるも今は心苦しう(大将を拝顔申し上げるのも今や気詰まりで)、かたじけなうおぼゆるさまなれば(勿体無くも感じられる重役ぶりなれば)、人通はしたまふ塗籠の北の口より(宮が女房の出入りを許していらっしゃる塗籠の北の口から)、入れたてまつりてけり(大将を中にお入れ申し上げてしまったのです)。

いみじうあさましうつらしと(非常に情けなく辛いと)、さぶらふ人をも(側近の女房でさえ)、げにかかる世の人の心なれば(実にこのように世情に流される考えであってみれば)、これよりまさる目をも見せつべかりけりと(この先もっとひどい目に遭わされそうだと)、頼もしき人もなくなり果てたまひぬる御身を(頼れる人もいなくなってしまった御境遇を)、かへすがへす悲しう思す(宮はつくづく悲しくお思いになります)。

*男は(宮に直面した大将は女を抱く男の言葉として)、よろづに思し知るべきことわりを聞こえ知らせ(宮の処遇とそれに伴う郎党たちの抱えを初め、いろいろと御承知なさるべき世間の仕組みをお聞かせ知らせ申し)、言の葉多う(多言を弄して)、*あはれにもをかしうも聞こえ尽くしたまへど(可愛いとも綺麗だなどとも言い聞かせて思い切りなさったが)、つらく心づきなしと*のみ思いたり(宮は女になりきれず、辛く不愉快にのみお思いなのでした)。　*「男は」は注に＜『集成』は「男女対座の場面なので、「男」と端的に呼ぶ」。『完訳』は「男女関係強調の呼称」と注す。＞とある。が、是は情交場面を意味する、と読むべきだ。　*「あはれにもをかしうも」は事の最中に男が漏らす言葉。「尽くす」は＜射精＞。　*「のみ」は重く悲しい。

「いと(いやまったく)、かう(これほどに)、*言はむ方なきものに思ほされける*身のほどは(身を任す相手では無いとあなたにお思い頂いたこの私は)、たぐひなう*恥づかしければ(例え様も無く恥ずかしいので)、あるまじき心のつきそめけむも(あるまじきあなた様への恋心を抱き始めたことさえも)、心地なく悔しうおぼえはべれど(身の程知らずだったと悔やまれますが)、とり

返すものならぬ*うちに(もう私との結婚を無かったことには出来ないのだから)、何の*たけき御名にかはあらむ(今さら皇女の誇りもないもんでしょう)。　*「言はむ方なし」は＜性反応が無い→身を任さない＞。　*「身のほど」は、多分この時代背景では明瞭に＜王家と臣下の身分違いという身分の低さ＞ということを意味しているのだろうが、しかし大将は自分を「ただうど」とは明言せず、あくまで「身のほど」という曖昧表現を意図して使っている。この作為は今の日本語にも基本的に備わる言語構造で、もしかすると全言語が有する作用として、一度形成された基本概念が時代背景の変化によって変質して行く、その総体を曖昧表現は含んでいて、搦め手の説得力を有するもの、にも見える。その搦め手の反語作用で、この「身のほど」は一見へりくだっていながら、実に皮肉っぽく、落ち目の権威王家は実力ある臣下の庇護に浴さなければ体面が施せない、と因果を含めていることになる。嫌味な捨て台詞の趣だが、大将は今さら宮を棄てる訳には行かない。肌を合わせれば何とかなると思っていた大将の自尊心は少なからず傷付いたか。それでも何とか宮を納得させて、実質で自分の女にするしかない。*「恥づかし」は不本意な一戦だっただけに実感がこもっている、のだろう。　*「うちに」は＜そのうえに。とりわけて。＞と古語辞典にある。もはや～なのだから、という語用だろう。　*「たけき御名」は＜皇女の誇り＞だろうが、「たけし」には宮の＜意地っ張りな無反応＞に対する非難が込められている、のだろう。

いふかひなく思し弱れ(もう仕方の無いこととお諦め下さい)。思ふにかなはぬ時(思い通りにならない時)、身を投ぐるためしもはべなるを(身を海に投げて死ぬという話もあるようですが)、ただかかる心ざしを深き淵になずらへたまて(只今はこの私の愛情を海の深みに準えなさって)、*捨てつる身と思しなせ(死んだ心算でこの腕に飛び込んで来て下さい)」　*「捨てつる身＝死」に大将がイヤラシサを込めていることは間違い無い。私に身を任せれば死ぬほど良い思いをさせてあげる、という甘美な誘いは、実は死ぬほど良い思いをする物性は愛される側自身が備えている生理機能なので、一歩間違えれば安っぽい下品な言葉になりかねず、堅物にこういう台詞は言えない、と言うか、似合わないから、やはり源君は相当に女慣れしている、と分かる。当然だ。近衛大将がこう言えば、女は安心して身を任せる、普通は。それが無反応とは、源君の悔しさが滲む。

と*聞こえたまふ(と大将はお話しなさいます)。　*「聞こえたまふ」は、取次ではない直答は勿論のこと、物越しでもない直面の閨の場面だから＜申し上げなさる＞よりは＜話して聞かせなさる＞。

単衣の御衣を御髪込めひきくくみて(すると宮は、布団覆いの薄手の夜着を頭から被りなさって)、*たけきこととは(精いっぱいの反感表示として)、音を泣きたまふさまの(声を上げてお泣きになっていらっしゃるのが)、心深くいとほしければ(大将には心底情けなく)、　*「たけし」は＜（「たけきこと」の形で）精いっぱいである。＞と大辞泉にある。それに此処では、宮は大将の言った「何のたけき御名にかはあらむ」に反感して、それを示しているのだろう。

「いとうたて(うわ何だ)。いかなればいとかう思すらむ(どうしたらこういう気にお成りなさるのかね)。いみじう思ふ人も(意固地な女でも)、かばかりになりぬれば(実際に肌を合わせた仲になれば)、おのづからゆるぶけしきもあるを(普通少しは物腰も柔らかくなるだろうに)、岩木よりけになびきがたきは(岩や木以上に情が通じないとは)、契り遠うて、憎しなど思ふやうあなるを(まるで前世の縁が悪くていがみ合う犬猿の仲みたいだが)、さや思すらむ(そんな風に私を犬か猿のようにでもお思いなのだろうか)」

と思ひ寄るに(と思い当たると)、あまりなれば心憂く(救いの無さに嫌気して)、三条の君の思ひたまふらむこと(三条夫人がお悲しみであろうこと)、いにしへも何心もなう(昔も無心に)、あひ思ひ交はしたりし世のこと(愛し合っていた若い時のこと)、年ごろ、今はと(長年を経て今こそ)うらなきさまにうち頼み(疑いも無く信頼し)、解けたまへるさまを思ひ出づるも(打ち解けていらっしゃる暮らしぶりを思い出すにも)、わが心もて(自分の気持の所為で)、いとあぢきなう思ひ続けらるれば(ひどく不都合なことになっていると思えるばかりなので)、あながちにもこしらへきこえたまはず(敢えて宮を取り成し申し上げもなさらず)、嘆き明かし*たまうつ(憮然として夜を明かしなさったのです)。　*「たまうつ」は「たまひつ」のウ音便。「つ」は完了の助動詞。「たまへり」の事象報告よりは、動作完了の意味を込めた結果報告の感。

[第六段　夕霧と落葉宮、遂に契りを結ぶ]

*校訂された表題にノートしても始まらないとは思うが、「遂に契りを結ぶ」は些か刺激的な言い方で印象深く、どうしても誤解を誘うように見えるので質したい。五段原文に「男は」と明示された文があり、其処を情交場面と読むのが素直な読者の姿勢かと思われ、そう読まないと当段の文意も読み損ねかねない、かと思う。

*かうのみ痴れがましうて出で入らむもあやしければ(しかし、こう内倉の塗籠にばかり用人のように主人が出入りするのも変な話ということで)、今日は泊りて(この日はそのまま塗籠に留まって)、*心のどかにおはす(大将は気長に宮を抱くことになさいます)。　*「かうのみ」は注に＜「かく」副詞、「痴れがまし」を修飾。副助詞「のみ」のニュアンスを添える。＞とある。が、「かうのみ」が「痴れがましうて」を説明しているという意味自体が分からない。というか、そんなに露骨に下ネタを書くものか、と疑う。即ち当文は、「かうのみ」は＜宮が無反応のまま＞だから、性器を「出で入らむも」張り合いがなく「痴れがましうて」とても我慢できないほど「あやしければ」、「今日は泊りて(今度は挿入したままで)」「心のどかにおはす(じっくり責めなさる)」と濃厚な二回戦の実況になっている。しかし、是が表意では下品に過ぎないか。何か見落としていると思ったら、此処は＜塗籠＞という舞台設定で、塗籠は内倉なので、そこに主人の殿が何度も出入りするのが「あやし＝変」という、暗意筋に気付いた。「痴れがまし」は＜用人のように＞という具体意を持つ。この、多分当時の女房たちにとっては何気ない、常識を、言い換え文では表意にして置かないと、作者の品性を損なう。　*「こころのどか」は＜心しずか。のんびり。＞と古語辞典にあるが、此処では＜気長に構えて＞。「おはす」とはあっさり言ったもんだが、この語こそが＜情交＞を示す。是は明示しないと文意を損なう。宮の抵抗に傷付いた大将が、それを癒さずに塗籠の中で＜のんびりできる＞ワケが無い。「癒す」とは、この場合＜宮を反応させること＞だ。それにしても、「かうのみ痴れがましうて出で入らむもあやしければ」とは、ずいぶんと洒落た言い回しを思い付いたもんだが、この手の話には人は結構良く頓知が利くもんだ。尤も＜塗籠＞の下準備は作者が念入りに仕立てていたようだが。

かくさへ*ひたぶるなるを(そのようにゆっくり愛撫なさる大将がこれほどまでに熱く突き立てたままなのを)、あさましと*宮は思いて(変な人と宮はお思いになって)、いよいよ疎き御けしきのまさるを(ますます遠ざける御態度なのを)、*をこがましき御心かなと(子供じみた御気性だと)、かつは(大将は自分の情熱が通じないのが、一つには)、つらきものの*あはれなり(情けないものの、今回は濡れごとの情緒はあったのです)。　*「ひたぶる」は＜[形容動詞ナリ]ただ一つの方向に強く片寄るさま。＞と古語辞典にある。是を＜ひた向きなさま＝一途だ、熱心だ＞と取ることは当然出来るが、この＜倉の中の男女＞という場面で大将が何かを一途に思い詰める、なんてことはない。などと、まどろっこしい言い方をするまでも無く、既にこの物語の閨の場面、とは即ち濡れ場でありエロ部文だが、それは物語上の要点の割りには描写場面が少なく、しかしそれだけに政治機構、身分秩序、都市設計、建築、作庭、行事、行儀作法、服

装、化粧、香、音楽、舞踊などなどの貴族生活総体を含めた文化の中での人間模様として描かれてはいるのだろうが、での「ひたぶる」の語用は＜男根の屹立＞を示していて、いわゆる逐語訳に努めたとしても＜一途＞なのではなく＜激しい＞というべきだが、「激しい」は暴力的な性戯を思わせるので避けたい。というのも、当然ながら作者は場面描写を文字に写すには、必ず具体像を思い描いているのであり、その表現は昨今のポルノのように「乳首を舐める」「陰核を玩ぶ」「股間に顔を埋める」「男根を咥える」及び其々の形状特徴などと微細ではないが、また微細はそれなりに説得力はあるが、それを言い出したら切りが無い所もあって、必ずしも性戯場面の情緒を表現しないが、ともあれ、少なくも想定に無いことは言わない、言えない。で、上文に「心のどかにおはす」とあるのは、一回戦で無反応だった宮にまたぞろ捻じ込んで力づくで出し入れしても、もはや大将は思い切れず、この二回戦では大将は己が男根を宮の下腹に納めさせたまま、ゆっくりと時間をかけて、宮が次第に絆されるのを待った、ということだろう。が、どうもそれでも宮は不感症状態だったらしい。が、大将は何とか果てたようだ。　*「宮は」は注に＜主語「宮は」を添えて強調する。「女は」とはないことに注意。＞とある。鋭い指摘だ。が、是が閨の場面であることには違いなく、「宮」の語が意味するところは＜女に浸りきれない冷めた意識＞だと私は解する。ただ、肌を曝しての、生身の女としての二回戦に臨んでの宮の不感症状態は、本当の不感症でもない限り、この期に及んでは虚飾も隠蔽も通じないのだから、もはや皇女の誇りが為せるワザ、でもないかの示唆さえも感じさせる「宮」の語用だ。作者が本当に女で、作意を持って「宮」と言ったのだとすると、この辺の語りは女同士でしか実感できないことを言っているのかも知れない。もしかすると、この「あさまし」は故衛門督藤君とは違う、という感触を示していたりして。だから私にははっきりとは言えないが、この「あさまし」は＜あきれる＞よりは＜変に思う＞と見て置く。　*「をこがまし」は＜ばかげている、愚劣だ＞という言い方のようだが、それは不満足な印象を受けたことを言っているだけで、不満の中身が分からない。また＜おとなげない、生意気だ＞という意味でも使うが、それもこの場に馴染まない。ただ＜おとなげない、生意気だ＞は「小子がましい」とも当てる事が出来そうで、そうなると＜子供じみている、未成熟だ＞という語感になり、それなら不感症に対しても、そういう見方も成立するような気がする。　*「あはれなり」は微妙だ。基本的には共感や同情を示す語で、大将は自尊心を傷付けられながらも、どこかで宮を愛しく感じたらしい。だから、思い切れたのだろう。しかし、宮は性反応は見せていない。となると、自ら進んで歓びを求めないものの、また打ち解けもしないものの、もう泣いて困らせることはせず、犬猿の仲のような毛嫌う態度もせず、静かに憂いを見せて、それなりの風情を漂わせていた、くらいには読めそうだ。で、となると、「かつは」には＜この二回戦は＞という意味合いがあるのだろう。

塗籠も、ことにこまかなるもの多うもあらで（塗籠の中も特に細々としたものは多くもなく）、香の御唐櫃（かうのおんからびつ、香木入りの衣装箱）、御厨子（みづし、物置棚）などばかりあるは（などばかりあるのを）、こなたかなたにかき寄せて（隅に寄せ集めて）、気近うしつらひてぞおはしける（寛げるようにしていらっしゃいました）。うちは暗き心地すれど（土壁造りなので内側は暗い感じだが）、朝日さし出でたるけはひ漏り来たるに（朝日が差し込んでくる人々の動きが漏れ聞こえる頃に）、埋もれたる御衣ひきやり（大将は宮が被っている上掛けを払い除けて）、いとうたて乱れたる御髪（とてもひどく乱れた宮の御髪を）、かきやりなどして（撫で揃えたりして）、ほの見たてまつりたまふ（その御顔を薄暗い火影で拝見申しなさいます）。

いとあてに女しう（宮はとても上品で女らしい優しい顔立ちで）、なまめいたるけはひしたまへり（優美な姿でいらっしゃいました）。男の御さまは（大将の夫ぶりは）、うるはしだちたまへる時よりも（近衛制服の凛々しいお姿よりも）、うちとけてものしたまふは（打ち解けていらっしゃっる方が）、限りもなうきよげなり（この上なく美しいものでした）。

故君の(こきみの、亡き夫が)異なることなかりしだに(取り立てて高い地位でもなかったのに)、心の限り思ひあがり(自分なりに名門を自負して)、御容貌*まほにおはせずと(宮の御顔立ちがそれに見合うに足りていらっしゃらないと)、ことの折に思へりしけしきを思し出づれば(事ある毎に不満顔だったことを思い出しなさると)、「*ましてかういみじう衰へにたるありさまを(更に今は年老いてひどく衰えてしまった私の容姿を)、しばしにても*見忍びなむや(殿は僅かな時間であっても見過ごせるのだろうか)」と思ふも、いみじう恥づかしう(と思うのも宮は非常にきまり悪く)、とざまかうざまに思ひめぐらしつつ(あの大将の情熱が誠意なのか遊びなのか様々に逡巡して)、わが御心をこしらへたまふ(自分の御気持ちを整理なさいます)。　*「まほ」は＜程度が十分なさま＞とも古語辞典にある。 *「ましてかういみじう衰へにたるありさま」は注に＜柏木との結婚当時以上に年衰え醜くなった、の意。『完訳』は「宮は二十代後半であろう。ちなみに女三の宮は二十四、五歳。確かに、女盛りは過ぎている」と注す。＞とある。宮が素直になれなかった原因は、この劣等感にあった、というオチらしい。そう言えば、小野山荘で宮が大将に隙を見せたのも、元々宮にその気があった、と見る方が自然だ。それを、最後の一歩が踏み出せないのを、やれ皇女の身分だの、御息所の懸念だのと、如何にも始末の悪い言い訳をしていたのも宮自身だ。御息所はその宮の気持ちが分かったからこそ、大将の不参に宮が不憫でならず、思わず通いの催促をしたに違いない。だが、しかし、そうは言っても、一度深く傷付いた心は二度と開放されない、とは良く耳にするし、何もトラウマとかいう言葉を使わなくても、誰でも自分の容姿や性格に何がしかの問題意識は持っていて、それに行動が相当程度左右される自覚もあるだろう。人が自分を客観視できるのは、本来はむしろ優れた能力というべき、と思う優越感こそが曲者で、自分はそういう知覚特性がある動物だ、くらいに思えば、あまり深刻にならずに済むのではないか。いずれにしても、そういう思いに捉われる実相は確かにある。　*「見忍びなむや」は注に＜主語は夕霧。敬語がないことに注意。結婚後の夫婦間の心情。＞とある。宮が大将を、外形上は小野山荘の夜で既定だが内実としては此処にやっと、夫として認識したことを示す文、なのだろう。重要な指摘かも知れない。従って、主語を＜殿＞と明示する。

*ただかたはらいたう(ただし宮は大将との結婚を、ただただ外聞が悪く)、*ここもかしこも、人の聞き思さむことの罪さらむ方なきに(各方面に於かれてお知りになる事の罪を避ける事が出来ない上に)、*折さへいと心憂ければ(喪中という謹慎の身である事が心苦しいので)、*慰めがたきなりけり(気が休まらなかったのです)。　*「ただ」は古語では＜ただし＞という接続詞語用はないようで、この「ただ」は＜ひたすら＞という意の副詞語用らしいが、文脈からすると＜ただ、しかし＞の思いは色濃い。*「ここもかしこも」は注に＜朱雀院や致仕の太政大臣をさす。＞とある。確かに「人の聞き思さむ」と敬語遣いになっている。　*「折さへいと心憂ければ」は＜母御息所の喪中であることをさす。＞と注にある。　*「なぐさむ」は＜心が晴れる。気が紛れる。＞または、むしろ＜楽しむ＞で relax,refresh,recreation, 系統の既定路線に変更の必要がない事を再確認する更新概念のようで、基調認識は順調に上手く行っているということなので、良いか、少なくも悪くない、ということだろう。宮は基本的には大将を歓迎している訳だ。不都合な状況認識を示す「いたはる(気を遣う)」や「なだむ(緩和する)」とは違う語感。

御手水(みてうず、御洗面や)、御粥(おんかゆ、朝ごはん)など、*例の御座の方に参れり(などは、塗籠から出て通常の宮の御部屋の方でお済ましなされました)。　*「れいのおましのかた」は注に＜塗籠から出ていつもの御座所に移る。＞とある。「塗籠」は役目を終えたようだ。

*色異なる御しつらひも(喪中様式の部屋模様も)、いまいましきやうなれば(新婚生活には縁起が悪いので)、東面は屏風を立てて(部屋の東側の目隠しには絵屏風を立てて)、母屋の際に*香染

の御几帳など(間仕切りには薄茶色の御几帳などや)、ことことしきやうに見えぬ物(派手にならない物で)、*沈の二階なんどやうのを立てて(沈木製の二段収納戸棚みたいなものを置いて)、心ばへありてしつらひたり(気を配って飾り付けてあります)。大和守のしわざなりけり(大将の命を受けて、大和守が用意したものでした)。　*「色異なる」は＜趣向が通常とは違う→喪中様式だ＞という言い方らしい。他にも、「色改まる」が＜喪が明けて平常服に帰る＞、「色変はる」が＜喪服を着て服喪する＞、という言い方などがある、とのこと。喪中様式については、以前どこかで少し語られていたような気がする。御簾が灰色で、屏風が墨絵、とか。　*「香染(かうぞめ)」は＜丁子を濃く煎じた汁で染めた物＞と古語辞典にある。ウエブの色見本では＜薄茶＞だ。　*「沈(ぢん)」は水に沈む重い木材。「二階(にかい)」は＜二段棚＞。「なんどやう(納戸様)」は＜収納戸棚みたいなもの＞。

人びとも(女房たちも喪服から)、鮮やかならぬ色の(派手な色合いではない)、山吹(黄色)、掻練(かいねり、薄紅)、濃き衣(深紫)、青鈍(青ねず)などを着かへさせ(などに着替えさせて)、薄色の裳(薄紫の裳)、青朽葉などを(薄黄茶色のものなどを)、とかく紛らはして(目立たないように着合せて)、御台は参る(給仕をお仕え申します)。女所にて(女所帯なので)、しどけなくよろづのことならひたる宮の内に(馴れ合いで万事が間に合わせで済ませていた宮邸の生活に)、ありさま心とどめて(作法を仕付けて)、わづかなる下人をも言ひととのへ(手薄の下働きでも上手く使い回して)、この人一人のみ扱ひ行ふ(大和守ひとりだけで取りまとめています)。

かくおぼえぬやむごとなき客人のおはすると聞きて(このように思い掛けない高貴な客人がお見えになっていると聞き付けて)、もと*勤めざりける家司など(以前は仕事に励まなかった執事などが)、うちつけに参りて(突然参上して)、政所など言ふ方にさぶらひて営みけり(管理事務所などという部屋に詰めて働くのでした)。　*「勤む・勉む(つとむ)」は＜励む＞。「勤めざりける」は＜怠けていた＞とも読めるが、仕事が無かったり、資金が無かったり、で励みようが無かった、という事情もあったかも知れない。未亡人家の遣り繰りの倹しさが窺える。実際、大将の援助で何とか維持していたのだろう。宮に選択の余地など初めから無かった、みたいな章落。しかし、天下の近衛大将の庇護を受けるは、宮家と言えども、決して可哀相な境遇とは思えない。むしろ、宮家にこそ相応しい、この上ない厚遇だ。